

韓国高等教育における公正性の問題について

—「三不」政策を手掛りに—

金 東 光

社会環境学会

『社会環境論究』

第8号 2016年1月

別 刷

韓国高等教育における公正性の問題について

——「三不」政策を手掛りに——

金 東 光

概要

韓国高等教育における「三不」政策は1999年度に導入されて以降韓国の大学入試制度の根幹をなす原則であった。この政策は高等教育へのアクセスに公正性を確保することをその旨とするもので、各大学による入学試験の施行、諸高等学校間に存在する質の差の区別、さらに寄付の見返りとしての入学の許可、の三つを禁ずるものである。これらの三つの禁止は大学社会だけではなく、韓国社会そのものにおいても敏感な政治的問題である。なぜならば、これらは社会階層化に直結する問題であるからである。本稿は、「三不」政策についての韓国の大学の学部長らの認識を描こうとするものである。その認識は、ソウル・京畿地域の大学と地方大学との間の格差の広がりに関連を持ち、学部長らの韓国高等教育における様々な問題に対する主観的な体験に基づくものである。この研究の結果、学部長らの認識が大学の所在地によって異なることが分かった。また、「三不」政策をめぐり、地方大学の学部長らは大方支持を見せる傍ら、ソウル・京畿地域の学部長らは好感を持っていない傾向があることも分かった。さらに、韓国高等教育そのものが競争と教育的卓越性という価値と、教育的公正性と社会正義という価値の狭間で迷いこんでおり、そのいずれの価値を優先するかは個別の状況に委ねるしかないことも明らかになった。

キーワード：教育的公正性、教育的卓越性、社会正義、競争、「三不」政策、首都・地方間の教育格差

* * *

はじめに

今日、高等教育が直面している難題のなかに、大学入試にどのような基準と方法を採用すればいいのかというのがある。韓国の場合、現在、大学入学は「修学能力」（略して「修能」）と呼ばれる競争的な試験により決定される。

学生の未来——つまり就職・収入・結婚の見通し——が、名門大学に入られるか否かにより大きく左右されるため、入試競争に勝ち抜くためのチューターリング・サービス（いわゆる「家庭教師」業）は受験生や父兄のための巨大なマーケットを形成している（S. Kim & Lee 2006; M. H. Lee 2008）。

入試競争において、学生は韓国社会の根底にある不平等さを初めて経験することになる。経済的に裕福な父兄は子供により良い学習環境を提供することができる。これは通常子供のために優れた能力の家庭教師を雇うか、子供をソウル所在の有名な塾に送る形を取る。もちろん、その塾は大学入試に関する膨大な情報やノウハウを備えているわけである。その反面、経済的に余裕のない父兄はそのような手は打てない。このような実践が社会階層の先鋭化をもたらし、2、30年前とは違って現在の韓国社会において深く根を下ろしてしまった（Koo 2007）。

本研究のためにインタビューしたある私立大学の学部長は、韓国社会の多くの病は「我が社会の大学入試制度と結びついている。ここに問題がある、いや、ありすぎる」（Dean K, SKKU）と言っている。この学部長によれば、大学入試制度が社会階層の先鋭化をもたらしただけでなく、失業と首都・地方間の格差も生み出す原因にもなっている。本稿では、現行の大学入試制度とそれを圧迫する様々な要因に対する学部長らの認識を考察することにする。まず、富裕層によるトップ大学の独占を阻止しようとする「三不」政策に対する学部長らの立場を検討することにする。次に首都圏（ソウル・京畿地域）所在の大学と地方大学の間で深まる実力の差と、最後にその差をもたらす結果について考察することにする。これらのテーマは、OECD（Organisation for Economic Co-operation and Development、経済協力開発機構）が韓国高等教育における公正性の問題として取り上げているものである（Grubb, Sweet, Gallagher, & Tuomi 2009）。

本稿で使用したデータは、韓国を代表する6大学の学部長23名と役職の経験をもつ教授3名とのインタビューから得られたものである。これらの大学は国立と私立を含んでおり、ソウルとその周辺だけでなく地方所在のものもある。本稿で示された学部長らの教育的公正性についての見解は、大学が現に直面している（大学の）自律性という、より大きな次元の問題についての認識の一反映である。

「三不」政策とは

「三不」政策は大学入試の規制のために韓国政府が1999年に導入して以降現在も続いている、教育的公正性を確保するための政策である。この政策は大学にそれぞれの入学試験（韓国語では「本考査」という）の施行、諸高等学校の区別（ランク付け）、寄付による入学の許可、の3つを禁止している。「三不」政策は、富裕層の子弟が名門大学へのアクセスを独占すること、また富裕層が固定化し永久化することを阻止することに、その目的がある。それは、富裕層の永久化が他の階層による社会的上昇の道を閉ざしてしまうものであるからである。「三不」政策と教育公正性の問題との関連を理解するためにその「不」の一つひとつを検討する必要があるだろう。

第一の「不」は各々の大学の独自の入試（以下、「本考査」）を禁止するものである。現在、「修能」は学生の選抜に適用される唯一の試験である。韓国のすべての学生は、同じ土俵で競争し、皆頑張れば名門大学に入ることができるとの認識の下で受験対策に励んでいる。

しかしながら、「本考査」が採択されれば、多くの費用のかかる塾（韓国語では「学院」と、特定大学への入試のためのチューターリング・サービスが氾濫することになる。ただ一つの試験しかない今日にすら、塾が乱立している状態である。このような塾とチューターリング・サービスはすでに韓国に葛藤を引き起こす社会問題になっている。というのも、それらが、学生と父兄に相当な経済的負担をかけているからである（C. J. Lee 2005; Sorensen 1994; Sung 2011）。

「本考査」が復活すれば、裕福層の学生が他の階層の学生に対し不公平に占めている有利な立場が一層強まることになりかねない。名門大学への入試を専門にする塾とチューターリング・サービスは増加するだろうし、これはまた名門大学への入試をめぐる競争を現在より遙かに激しいものにするだろう。社会的特権層の学生は名門大学専門のチューターリング・サービスを利用することによってその大学への入学可能性を高める（J. Kim & H. S. Kim 2013; Sung 2011）し、これはまた彼らの社会的立場に有利さを与える。このように「本考査」の復活は学生の（ゆくゆくは市民の）社会的地位をめぐ

る悪循環をもたらす。

第二の「不」は大学に諸高等学校を、その質（に対する主観的な認識）に基づいて区別する行為を禁ずるものである（Park 2007; Sung 2011）。韓国では裕福な都市・地区を貧乏な都市・地区から識別することはそれほど難しいことではない。そして裕福な地域にある学校に通う学生は他の地域の学生より成績が優秀である傾向がある（S. Lee & Brinton 1996）こともよく知られている。大学がこれらの裕福層学生に目を向けることも当然である。なぜならば、この学生らはより優れた成績を取めるか、もしくは（裕福な彼らの家族からの寄付という形で）財政的により役に立つ場合が多いからである。それゆえ大学は富裕な学区と普通の学区の学生を区別しようとする。このような選好とそれによる選別の実践は社会階級をより強固なものにし、その一層の両極化へと韓国社会を導く。

第三の「不」は寄付による入学を禁ずるものである。この「不」の理由は明らかであろう。寄付による入学が許されれば、富裕な家庭の学生が、貧乏な家庭の学生より学的才能が劣る場合にも、より評判の良い大学での修学が可能になる。「『この金銭の見返りとしての入学』制度は、能力による入学の獲得のできない富裕層の家族にあまりにも不公平な有利さを与えるように設計されている」（Sung 2011, P. 529）。

大学にのしかかる様々な圧迫要因

新自由主義的な教育改革が容赦なく進んでいる今日、大学は益々実績評価システムの下に置かれ、常に業績評価を意識しながら作動している（Rizvi & Lingard 2010; 2011）。このような評価システムにおいては国家からの教育財源の調達に測定可能な、すなわち目に見える客観的な業績を上げることにかかっている。それゆえ測定可能な成功が大学財政の必須条件になっている。

測定可能な成功を目指す大学の奮闘を煽る一つの要因に、韓国の全体的人口減少に伴う学生数の減少の現実がある（Dean K2, KU; Dean L, KNU; Dean L, Yonsei）。今後数十年のうち廃止される大学が多く出ると予想されている（Dean M, Yonsei; J. Kim & H. S. Kim 2013）。韓国の大学はより良い評判とより健全な財政のためにのみならず、生き残りのためにも競争

しているのである。

このように大学に様々な圧迫要因がのしかかっているだけに、韓国の学部長らがもっとも優秀な学生のリクルートに関心を寄せるのも驚くべきことではない。優秀な学生は卒業後の就職率が高いし、公務員、弁護士、公認会計士、医師免許のための試験に受かる可能性も高い。そして学生の就職率は大学の評判とランク付けに直結する。それゆえ、最初から優秀な学生のリクルートがもっとも大事である (Dean S, PNU)。このように言っている学部長は「上位何パーセント」——恐らく「修能」における上位5乃至10パーセント——の学生をリクルートするのにすこぶる関心を寄せる。この学部長の言い方は、学生の「修能」成績が優秀さの基準であることを示唆している。「もちろん学生が優秀になるように教育することは重要であるが、最初から優秀な学生に来てもらうことの方が遙かに重要である。」

多くの学部長は、政府が大学に学生選抜の方法を指導することに対して不満を抱いている。彼らは韓国の教育部（文部省）の「三不」政策やその推進方式に問題があると考えている。その不満をある国立大学の学部長は次のように表す。「ほっといてくれればいいのに、教育部は今も入試政策から教員の授業、学生定員、学科等にまで干渉し続けている」(Dean B, SNU)。もう一人の国立大学の学部長は、「教育部の統制が厳しすぎるのではないか、教育部は学生の選抜方式を含めすべてをあまりにも画一的に進めていくのではないか」(Dean S, PNU)と言っている。

しかし政府の学生選抜の基準に対するもっとも大きな苦情は私立大学から寄せられている。「国が(大学に)自律をくれるかに見えても殆どくれません。これは改善されなければならない。……例えば、学生を選抜するときに、いちいち例示しながらこのような選考方式を使いなさいと指図してくるのです」(Dean K2, KU)。学生選抜の面でより大きい自律性を持ちたいというこの学部長の願望に他の私立大学の教授も共感する。「いわゆる SKY[SNU, KU, Yonsei] 大学は、自由な学生選抜ができるように、『本考査』を含めすべての選考方式を認めてくれるようにと、自律性を要求しています」(Professor S, KU)。

大学は常により大きな財源を必要とする。政府そのものが国立・私立大学共にマーケット式的高等教育ガバナンスの実践を勧めている (J. Kim & H.

S. Kim 2013; Park 2007; Sung 2011; Professor K, PNU)。それゆえ諸々の大学が現に「三不」政策により規制されている領域において自律性を欲しがるのは理解できる。このようにして、高いランクや就職率を評価する新自由主義的な教育財政制度と、学生数の減少に伴う大学廃止の可能性という脅威のせいで、学部長らのなかの「三不」政策の支持者が減少してしまった。支持者が減ったばかりではなく反対者も現れてきたのである。

しかしながら、学部長の不満がすべて「三不」政策に向けられているわけではない。これらの圧迫要因によって生じるあまりにも激しい競争が公正でも妥当でもないものと見なす学部長らも存在するのである。ある国立大学の教授が言っているように、このような競争は教育の本質をあらゆるレベルで乱す「ゲーム」であるかもしれない。

韓国の大学は様々な問題を掲げていますが、そのなかで極めて深刻なのが大学卒業生の失業問題、大学の序列化による首都圏の大学と地方大学の格差の拡大化、そして、大学の序列化が固定され、これが中高等学校、しいては小学校のレベルですら入試競争を扇ぎながら教育の本質を歪めていることです。首都圏にある大学に進学するためには今や小学校の段階から塾に通いスペックを強化しなければなりません。この非常に憂慮すべき状況が改善されるどころか悪化するばかりです。(Professor K, PNU)

ソウル・京畿地域の大学と地方大学の間の教育格差

もっとも優秀な学生の獲得をめぐるこの極端な競争のもたらす結果の一つは、多くの国立大学のランク付けが落ちていることである。この現象の影響を受けているのは主に地方にある国立大学で、その傍らソウル大学はそのユニークで特権的な地位により「生かされている」と私立大学の学部長ら(Dean K, SKKU; Dean H, SKKU)は見ている。地方国立大学のランクの下落はその卒業生の就職率の低さと結びついている。実際の問題として、韓国の大手企業の殆どがソウルに本拠を構えており、首都圏(ソウルと京畿道)大学の卒業生の採用を嗜好している。その理由は様々であろうが、ソウルと

その周辺地域の大学の質が高いという先入見、その卒業生がソウルの地理と事情に馴染んでいること、ソウル語を使用できること、面接場所へのアクセスが容易であること等を上げることができるだろう。

ソウルにある大学の質が高いとの認識はそもそも韓国のすべてに対するソウル中心的考え・態度を反映するものである。周知のとおり韓国は歴史的に高度の中央集権的行政システムを持った国家である。「規範的」なソウル中心主義の下で大手企業の採用責任者らはソウルとその周辺の大学の卒業生を嗜好してきたわけである。驚くことなかれ、ソウルと周辺の大学は今や学生（在籍生や卒業生）の高い就職率を誇り、高い収容定員充足率を維持している。当然ながらソウル地域の大学は、この事実が教育の質の高さを裏付けるものであると主張している。ソウル地域の大学は、その推定上の教育的卓越性に加えて、研究機関としての卓越性、すなわち優れた研究成果を出す能力も増している、と言うのである。教育的卓越性や研究的卓越性をめぐる是非はともかく、このような認識・先入見の影響の下であらゆる評価機関がソウル地域の大学を地方大学より高く評価しているように思える。

大学のランク付けが有効なものであれ、そうではないものであれ、それは教育的公正性に対して大きな意味を持つものである。大学のランク付け、特に国内のランク付けは学生の就職率と結びついている。これらのランク付けの結果がもたらした被害を真正面からこうむるのが地方大学である。ある国立大学の教授は言う。

結局、大学の順位というのは卒業生の就職率につながっています。大学の序列化という問題は、首都圏の大学と地方大学の間の就職率の差のことであり、これが（大学の）評判の格差を導きます。その結果として、地方大学は死んでいくのです。（Professor K, PNU）

国立大学の二人の学部長も自分の大学の競争力とランク付けの下落を残念に思いながら次のように言う。「慶北大学において我が学部は過去には伝統的に漢江以南の最高の学部であるという名声を誇っていました。しかしながら、今はソウルにある大学と地方大学の格差が生じ……」（Dean L, KNU）。「釜山大学はいわば『お山の大将』なのです。これは東南圏では一番優秀な

大学であるけれど、首都圏ではその競争力がますます落ちていきます」(Dean K, PNU)。

もう一人の国立大学の学部長も、多くの地方国立大学の学部長らの気持ちに共感を示しながら、大学のランク付けに使用される基準が公正でも妥当でもないと思え納得しがたいとの姿勢を見せている。この学長はいわゆる大学ランク付けに対して不信と苦痛を次のように吐露する。

学部長会議に行ってみると、慶北大学が全国で18位、19位であるというのを耳にします。20位以下に落ちるのは時間の問題でしょう。その理由は、1位から20何位までをソウルにある、4年制の群小大学が占めるから。その次が釜山大学と慶北大学。全南大学は行ったり来たり。すでに答えが出ていると自嘲の声が聞こえてくるのです。(Dean R, KNU)

ソウルにある大学と地方大学の間の格差が大きくなるのに注目し、またその格差が固定化する傾向があるのに気づきながら、釜山大学のK教授は大学ランク付けというテーマにより緩やかなアプローチを取る必要があると言っている。

大学の序列化が固定されれば、いや固定程度ではなく、大学の間に順位が決まれば、その変動はおろか、前の順位と後ろの順位の間格差は大きくなるのみです。だから、この大学の序列化を緩和する必要がありますが、私立大学は「選択と集中」(有利に働くと期待される特定の分野の選択とそれへの資源の集中)を通じて客観的な指標のない大学の序列化に優位を占めるために評判を一生懸命に追求しています。(Professor K, PNU)

ある国立大学の学部長は、首都圏大学と地方大学の間の格差の増大について、これは韓国高等教育の異常な展開であると警鐘を鳴らす。「このように行けば、結局ソウルにある私立大学のステータスは益々高くなり、地方にある国立大学は落ちこぼれになってしまいます」(Dean C, PNU)。実際このような事態はすでに2, 30年前から現実になっている。そのもっとも深刻な影

響はこれから現れてくるだろう。つまり、ソウルにある私立大学の評判は元々は上で触れたような疑わしい基準に基づいたものであったが、今や実質的なものへと転換され、これはソウル所在の私立大学と地方国立大学との間の真の格差を生み出している。当然その格差はソウル所在の私立大学と地方所在の私立大学との間にはもっと大きい。地方の私立大学は地方の国立大学より遙かに劣悪な状況にあるからである。

ソウル所在の国立大学であるソウル大学は、法人化されたものの、地方国立大学が経験しているランク付け上の下落の運命を免れた。ある地方国立大学の学部長はソウル大学の利点についてこのように言う。「ソウル大学はインフラも充実しており、地方の国立大学とは違って、大統領令で運営されています。国務総理令で運営されている我が大学とは差があります」(Dean C, PNU)。さらにこの学部長は、自分の大学を含め地方国立大学が、ソウル大学がソウル所在の私立大学との競争時に使える利点を持っていないことを残念に思っている。「我が大学や慶北大学を延世・高麗大学や成均館大学と比べてみれば、(ソウル大学が持っているような)利点はありません」(Dean C, PNU)。

多くの地方国立大学の学部長らは、首都圏の大学と地方大学との間の教育における実質上と評判上の格差の問題を是正しようと努力している。たとえば、ある国立大学の学部長は、自分の大学のステータスをより高めるのが最高の関心事であったとつぶやく。「慶北大学教育学部のかつてのステータスは良かったのですが、今はしきりにダウンしますから、そのステータスをどのようにすれば上げられるか、これに一番関心があったのです」(Dean R, KNU)。他の国立大学の学部長は、首都圏大学と競争するためには、一道・二特別市を含む広域の国立大学同士のコンソーシアムを結成することを提案している。

東南圏、狭くは釜山、蔚山、慶南が首都圏と渡り合える、大きくても一つの極を成せるところであると考えています。ここで首都圏と競争できる教育システムさえ備えればこの地域が共に発展できると考えるわけです。(Dean C, PNU)

地方国立大学の学部長らは、自分の大学が掲げている不利を明らかに認識しながらも「それでも（大学の）自助努力がもっとも重要であろう」（Dean K, PNU）と考えている。同時に彼らは国中の教育と経済へのより均衡の取れたアプローチを大声で呼びかけている。彼らのロジックは簡単であるが説得力がある——全体が発展しようとするれば、部分も同行すべきである；部分の貢献なくしては全体の繁栄はあり得ないというのである。「国家・国が繁栄しようとするれば、（釜山市民は）釜山で住みながらも良い教育を受けられるべきではないでしょうか」（Dean S, PNU）。「大韓民国が発展するために、（ソウルとその周辺という）一極集中で行ってはいけません。……一極集中で行けば、結局は規模の経済の効果ではなく、規模の非経済の効果もしくは非効率性の効果が現われ、我が社会の発展に良くない影響を及ぼすだろうと思います」（Dean C, PNU）。

これらの学部長らのこのような見解から、韓国高等教育にはソウル地域の大学の評判と財政を引き上げる、また地方大学のそれらを引き下げる因果関係の構造が存在することが伺える。ソウル地域の大学のそもそもの高いステータスや利点はその卒業者のより良い雇用を可能にし、またこれにより大学のランクをより高くに導く。これらの結果は当該大学の財源の増加と、学生のソウル地域大学に対する熱望の上昇をもたらす。財政の健全さはソウル地域の大学に、その名声を高める研究等の活動を可能にする。そしてこれらの大学への入学をめぐる競争が激しさを増していくなかで、これらの大学は全国でもっとも優秀であるか良いコネのある学生を選抜することができることになる。このような研究の量的増加と学生の質的向上はさらにソウル地域の大学の評判と卒業生の就職率につながり、これはまたそれらの大学の財政の増加やランク付けの上昇に導く、という仕組みになっている。この過程は繰り返されるごとにその強度を増していく。

地方大学の状況はそれとはまったく逆である。低いランク付けは質の低い学生の選抜と財政の減少に導き、これはまた低いランク付けに導いていく。このようにして下向きのサイクルが作られ、強度を増しながら繰り返されていく。このサイクルに歯止めがかからなければ、いずれ多くの地方大学が衰退してしまうだろう。

それは地方大学で学ぶ学生にとっても不幸な状況であると言わざるを得な

い。自分の籍を置いている大学の評判が落ち込むにつれ、彼らの就職の可能性も低くなっていく。かつては、すべての学生に経済的な成功を収める可能性がある程度はあった。しかし、これからは、ソウル地域の大学の卒業生は必ず成功し、地方大学の卒業生は必ず失敗するという、二分岐された高等教育システムの影響が出てくるだろう。これは教育的公正性と社会的調和を重んずるすべての人々が憂慮すべきことである。

結びにかえて

「三不」政策は学生の教育へのアクセスの面で公正性を確保しようとする韓国政府の努力の一環である。しかしながら、近年政府が導入した新自由主義的評価体制が重くのしかかるなかで、多くの大学の学部長らからその有効性がなくなったとの苦情の声が上がっている。ソウル地域所在の大学の学部長らは、この政策が、政府自身によって設けられた新しい競争的規範の範囲内での自由な動きを制限するものであると認識している。その傍ら、地方大学の学部長らは、「三不」政策がソウル・京畿地域の大学と地方大学の間の大きくなるのみの格差にけん制をかけるものとして支持する傾向がある。もちろん彼らさえもこの政策が万全なものとは思っていない。

「三不」政策をめぐる繰り広げられる論争は、一方で韓国社会が望みまた必要とする公正性と、他方で韓国政府が推進している新しい、競争に基盤を置く改革の間の矛盾を反映するものである。この矛盾に対しては、単純な解答もなければ、是も非もない。競争と公正性、そのいずれも良いものであるし、必要なものでもある。その両者の間には本質的な緊張関係が存在するだけのことである。結局のところ、韓国の大学入試政策は、諸々の大学のニーズと、教育的・学問的な理想と、韓国民の要求・願望との間で調整されなければならない。

【韓国の大学の略称と所在】

国立：SNU（ソウル大学、ソウル）、PNU（釜山大学、釜山）、KNU（慶北大学、大邱）
私立：Yonsei（延世大学、ソウル）、KU（高麗大学、ソウル）、SKKU（成均館大学、ソウル）

【参考文献】

- Grubb, W. N., Sweet, R., Gallagher, M., & Tuomi, O. (2009). *OECD reviews of tertiary education: Korea*. Paris: OECD.
- Kim, J., & Kim, H. S. (2013). Globalization and access to higher education in Korea. In H.-D. Meyer, E. P. St. John, M. Chankseliani, & L. Uribe (Eds.), *Fairness in access to higher education in a global perspective: Reconciling excellence, efficiency, and justice* (pp. 129-151). Rotterdam: Sense Publishers.
- Kim, S., & Lee, J. H. (2006). Changing facets of Korean higher education: Market competition and the role of the state. *Higher Education*, 52(3), 557-587.
- Koo, H. (2007). Changing faces of inequality in South Korea in the age of globalization. *Korean Studies*, 31, 1-18.
- Lee, C. J. (2005). Korean education fever and private tutoring. *KEDI Journal of Educational Policy*, 2(1), 99-107.
- Lee, M. H. (2008). The 'public' and the 'private' in Korean higher education: One private dominating system. *Journal of Asian Public Policy*, 1(2), 199-210.
- Lee, S., & Brinton, M.C. (1996). Elite education and social capital: The case of South Korea. *Sociology of Education*, 69(July), 177-192.
- Meek, V. L., Goedegebuure, L., & De Boer, H. (2010). The changing nature of academic middle management: A framework for analysis. In V.L. Meek, L. Goedegebuure, R. Santiago, & T. Carvalho (Eds.), *The changing dynamics of higher education middle management* (pp. 229-241). Dordrecht/New York: Springer.
- Park, H.-Y. (2007). Emerging consumerism and the accelerated 'education divide': The case of specialised high schools in South Korea. *Journal for Critical Education Policy Studies*, 5(2). Retrieved September 22, 2015, from <http://www.jceps.com/wp-content/uploads/PDFs/05-2-14.pdf>
- Rizvi, F., & Lingard, B. (2010). *Globalizing education policy*. Abingdon, Oxon/New York: Routledge.
- Rizvi, F., & Lingard, B. (2011). Social equity and the assemblage of values in Australian higher education. *Cambridge Journal of Education*, 41(1), 5-22.
- Sorensen, C. W. (1994). Success and education in South Korea. *Comparative Education Review*, 38(1), 10-35.
- Sung, C. J. (2011). Cultivating borrowed futures: The politics of neoliberal loanwords in

South Korean cross-national policy borrowing. *Comparative Education*, 47(4), 523-538.

(きむ どんがん／岡山大学グローバル人材育成院／E-mail: dkkim@okayama-u.ac.jp)

